

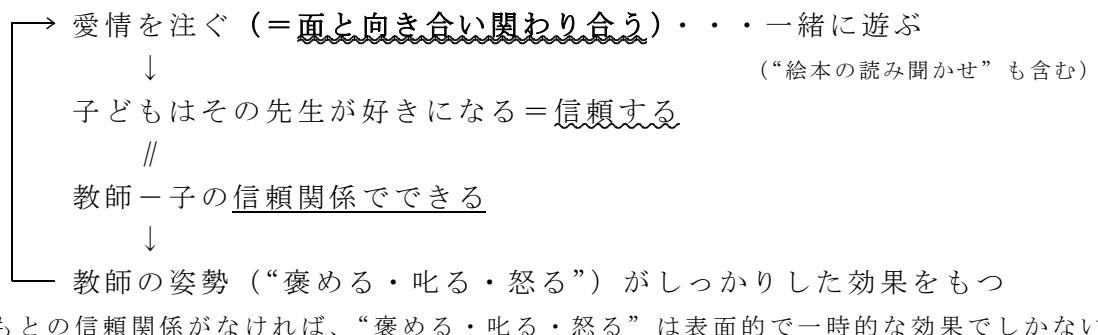
「こころの発達～Wallonの発達段階論～」（前半）での質問

2025年7月18日 金曜日
於：「発達を見守る会」

質問1：（生後）3か月までの母親との関わりの大切さですが、保育園に入園した段階で、それが足りない子が増えていると感じます。その時はどのように受け止め、支援が必要でしょうか。

返答： 私からすれば、とにかく“愛情を注ぐ”ということです。具体的には“一緒に遊ぶ”“褒めるときはしっかり褒め抱きしめる”“叱るときはちゃんと叱る”ということです。一般的には「（心身の）スキンシップを図る」ということになるんでしょうね。

私の経験からすると、その対応は次のような状況（からくり）を生みます。



（＊子どもとの信頼関係がなければ、“褒める・叱る・怒る”は表面的で一時的な効果でしかない）

ちなみに、私はそのことを次の体験から気づかされました。なお、（知的発達上）4, 5歳までの子どもは健常も障がいも関係なく、言葉では「先生」と言っても、それは単なる呼び名でしかありません。その先生と関わりたくて寄ってくるか否かは、その先生が好きかどうかで決まります。

・・・筆者はよく「感性が鈍る」という言葉を使うが、それは4, 5日、子どもとの関わりに空白を空けると、いわゆる「つう一かあ」の関係（感性）に違和感を感じ、1か月ともなれば、その感覚を取り戻すのにしばらく時間がかかることを意味してのことである。つまり、**それほど子どもとの「気持ちのやり取り」は微妙な感性の上に成り立ち、自らの内的状態が問われるものなのである。**

鯨岡（1999a）は「我が目を通して確認し、我が身を通して感じ取ったこと（P.107）」という言葉で、“人が人を捉える”ことの本質を表現するが、まさにこの言葉の通り、教師が生きた子どもの“真”的実態を捉えるというのは、紙（理論や検査）の上ではなく、直に子どもと「やり取り」することだと、筆者は確信している。（P.493）

（拙著：『知的障害児・自閉症児への発達臨床心理学アプローチ～理論と実際～』、沖縄タイムス社出版部、2015より）

事例その1



「この絵は何?」-「先生、分からないの?」「鬼さ~」

事例 85： US 君は知的障害の養護学校に通う小学 5 年の男の子である。内弁慶で、学級では生き生きとし、時折、学級担任に反抗もするが、同学年の隣学級との合同学習になると、静かになる。

ある時、隣学級との図工の合同学習で、絵を描くことになった。教師の課題説明の後、子どもたちは一斉に絵を描き始めた。しかし、US 君は描き始めようとしない。しばらく様子を見るが、やはり描かない。そこで、担任が鉛筆を US 君に握らせる。しかし、US 君は握ったまま鉛筆を画用紙に立てた状態で、それ以上、先に進めない。また、しばらくその様子を見る。やはりそのままである。そこで、担任が「US ちゃん、どうしたのかナー、描いてごらん」と言い、US 君の握っている筆先をちょっとつつき、鉛筆を押し出してやった。すると、ホッとしたように、一気に楽しそうに絵を描き出した。

後で気づくのだが、授業をリードしている教師は、日頃から授業のねらいや一般的に期待される活動・行動に沿わなければ、厳しく指導を行うはつきりした先生であった。

事例その2 — 金玉打ちの1年生Uちゃん(ダウン症女児)

質問 2：（独り言の）事例・・・の話で、（その独り言の）言葉が次に繋がることができないときは、どうすればよいのか、どのような声掛けがいいのか、気になりました。

返答： まず始めに確認しておきたいことは、独り言の事例（「コンニヤク食べる」）の話は、ことばだけで物事の“表象”ができるようになる、いわゆる頭の中だけで物事をイメージし、それを操れるようになる過程の話です。それは“コミュニケーション能力”とはまた別の話になります。

そのことを踏まえた上で、質問（「独り言の言葉が次に繋がらない」）の主意を“コミュニケーション能力”のことだと受け止めると、私の考え方（=基本姿勢）は、次のとおりです。基本的に質問 1 と同じです。

基本姿勢

親一子、教師一子の向かい合った対話 = 子どもとの積極的な関わり合い
↓
とりわけ、日課としての“絵本の読み聞かせ”を！！

ただし、その子に障がいがある場合は、その障がいの特性をちゃんと理解した上で、対応てほしいと思います。そうでなければ、教師に焦りが出、イラついてきますよ。



自閉症スペクトラム障がい・・・生まれついての“共感性欠如”に留意すること

(他者関係では相手からの問い合わせに応答する。人形遊びではいろいろな人物の役を演じ、漫画では登場人物の心情を(約2割が)理解する。しかし、生身の相手の心情は感受できない。そのため対他者の関係は自分の視点での一方のものになる)

知的障がい・・・原則、認知発達の流れとその子のレベルを踏まえること

(物事をいろいろと考え方や思考をスムーズに巡らすことを苦手(→未分化性と非融通性)とする。そのため“先を見通す”ことが難しく、結果として自己統制が苦手となり、そして“今を生きる”ことになる)

その他(親子関係を含む生活環境から生じた問題)・・・福祉との連携をしっかりとること

(福祉分野は学校教育の範囲を遙かに越え、日常生活を含め親子と関わる範囲が非常に広い。そのため福祉との連携は不可欠である)

【参考】

《表紙》

[川端 強:「絵本のある子育て~絵本の定期便~親と子の童話館ぶっくらぶ~」]

(こどもの本の童話館グループ、2021年3月より)



子どもは物語の楽しさとともに
言葉を身につけていく。

(納屋 恵)

琉球新報 2013(平成25)年2月4日「論壇」

絵本の読み聞かせ 子の心に

新城初枝 30代、母校渡慶次小学
73歳

30代に、母校渡慶次小学でPTA文集を作つてい
た頃、「私と絵本と娘たち」という小論文を書いた。一部紹介したい。

絵本の読み聞かせの重要性を知り、子どもが要求す

る時は仕事の手を休め、台所の片隅、洗濯機のそば、

アイロン台の前で、寸分の

時間を惜しんで読んだ。

毎日の読み聞かせは、いつ

しか娘たちの会話の中に絵

本の言葉が頻繁に出てくる

ようになり、さらに彼女た

ちの作文や創作童話の中

に驚かされた。

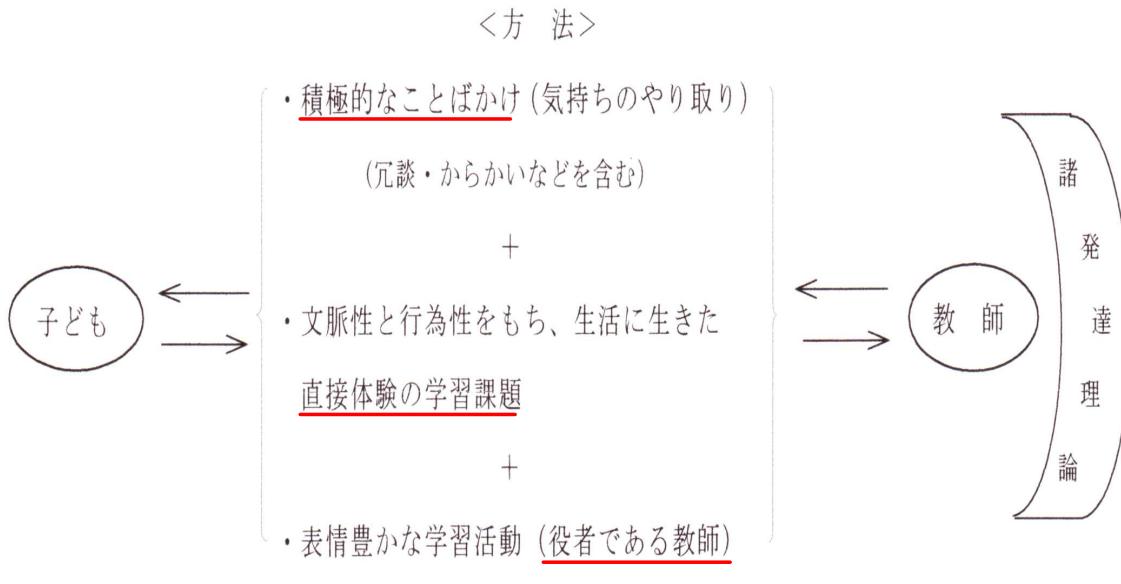
(読谷村、書道教室主宰)



(沖縄タイムス 2022(令和4)年9月28日 水曜日)

相互主体的プラグマティック・アプローチ InterSubjectively Pragmatic Approach (ISPA)

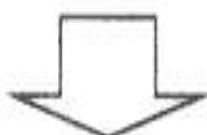
- 私の指導の基本原理 -



子どもを楽しみ、子どもと楽しもう！

相互主体的プラグマティック・アプローチ (ISPA)

子どもを楽しみ、子どもと楽しもう！



子どもを見る余裕・子どもと関わる余裕へ

子どもたちを楽しむ